

＜序論＞ 2月から今日まで、コロナウイルスのため、世界中の人々は自由を失い、健康を失い、仕事を失い、経済力を失っています。反面、家庭内の暴力は増えています。特に貧しい家庭においては食べ物、着物、水道代や電気代その他の諸経費に追い回されている現状です。今年の冬は、ブラジルではミナス州から南方に向かって、2ヶ月間は大変な寒さでした。果たして貧しい方々には十分に夜具があるのだろうか？ 温かいシャワーに入れられない方々は、どうして過ごしているのだろうか？ 同じ人間として生まれて来ているにも関わらず、どれほど多くの方が困っていることでしょうか。コロナウイルス感染者の75%は貧しい人々です。全国の死者は間もなく10万人を超えようとしています。

＜本論＞ 私達は人間としてクリスチャンとして、こうした現状を見聞きしていますが、どのように受け止めるべきでしょうか？ まず第一に、天のお父様に向かって祈ることを示されます。第二に、今日の聖書箇所(マタイ福音書25:32-46)をもう一度二度読み返して、神の前に冷静に思いめぐらす事です。そして、私達が主からいただいた中から、主の御名によって信仰と服従によってセスタ・バジカ(食べ物、着物、献金)を用意して思い切って捧げることです。これは決して無駄ではありません。まず最初に、この捧げ物はイエスキリスト様に差し上げていることなのだ、マタイ25:32~46に記しています。主にある兄弟姉妹たちよ。早速行動に移しましょう。教会としても、これに同意し聖霊の一致を持って喜んで捧げましょう。量は問題ではなく、捧げる動機が大切です。イエス様はその捧げ物は、まず第一に「私にしたのだ」と言われました。もし私達が主に従って、喜んで捧げるなら、主は喜んで祝福して受け取って下さるでしょう。

そして、やがて主の御前に行った時に、喜んで迎えて下さり、今日実行した貧しい民に捧げたことを思い出して、「良いことをしてくれた。さあ来たりて、私と一緒に喜ぼう」と言ってくださるのです。(マタイ25:32~46)。

＜結論＞ 聖書には、弱い人、貧しい人、食べ物、着物に困っている人々を助けている場面が多くあります。両親のいない孤児、夫を失った未亡人、身寄りがいない孤独な老人、旅行者、牢屋につながれた人々、住む家がない路上生活者などが、なんと多いことでしょうか。コロナウイルス病の感染は大変な悩みの原因となっていることは事実です。早く主が取り除いて下さることを祈っています。しかし、これは一つのチャンスだと思えるのです。それは彼らがセスタ・バジカを受け取ることによって喜んで下さり、心を開いて下さるなら、福音を届ける最善の機会となることでしょうか。

クリスチャンとして、これこそ最高に嬉しい事です。最も良い伝道のチャンスですね。最後になりましたが、皆様には是非読んでいただきたい聖書の箇所を記します。

ヨブ記29章全体と、ネヘミヤ記5章1～13です。

<実例> ブラジル国内でも多くの諸教会が、この奉仕に励み、伝道の機会としていることを、四方八方から聞いております。イタケーラのアバ・ホーリネスでは、毎月貧しい人々の約40家族にセスタバジカ(食料)を捧げています。その家族の皆さんは喜んで感謝して帰ります。その折に必ず30分間、福音を語ることにしています。どんな方が食料を捧げて下さるかと言えば、幾つかの教会や個人の信者が献金して下さるのです。

パウロは使徒20章34～35で言いました。「あなた方自身が知っている通り、この両手は私の必要のためにも、私と共にいる人達のためにも働いて来ました。このように労苦して、弱い者を助けなければならないこと。また主イエス自身が、『受けるよりも与える方が幸いである』と言われた御言葉を思い出すべきことを、私は万事に付け、あなたがたに示してきたのです」。